

聖霊を受けなさい——神の愛の火

使徒言行録 2 : 1 - 4、ヨハネ 20 : 19 - 20



司祭 ヨハネ 井田 泉

2017年6月4日

聖霊降臨日

奈良基督教会にて

今日は聖霊降臨日。祭壇のフロンタルの色は赤です。説教壇も聖書朗読台も、司祭のストールも赤。わたしたちの教会では期節、またその主日の意味に応じて四つの色を使い分けますが、主日に赤を使うのは2回しかありません。ひとつは主イエスの受難を記念する復活前主日（棕櫚の主日）。そのときの赤は、主イエスが流された血を象徴します。もうひとつは今日の聖霊降臨日で、今日の赤は神さまの燃える愛の火を現します。この礼拝堂の赤を心に写して、神の燃える愛を感じたいと願います。

2000年前、最初の主イエスの弟子たちの祈りの群れの中に、神の愛が激しく燃えた。その愛の火が教会を誕生させました。その神の愛の火は燃え続けて1900年後に、この奈良に教会を誕生させました。

今日の使徒言行録第2章にはこう記されていました。

「1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。 4 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」 2:1-4

神の愛の火は、過去に燃え、今も燃え、将来も燃えつづけます。それはわたしたちのために燃え続けるのです。

今日は聖書の中に出てくる燃える火の話を三つ思い浮かべてみます。それが聖霊降臨につながると思うからです。

第1の火は昼間です。遠い昔、モーセは羊の群れを導いて山の中に入って行きました。80歳のモーセはもう失意のうちに人生を終えることを感じていました。不思議なことに山の中に柴が燃えている。

「2 ……彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。」³ モーセは言った。『道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。』
3:4 主は、モーセが道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、『モーセよ、モーセよ』と言われた。彼が、『はい』と答えると、5 神が言われた。『ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。』」出エジプト記 3:2-5

これはモーセ 80歳のときの神との出会いの物語です。燃えて燃え尽きない神の愛が燃えて、モーセを捕らえました。それでモーセはエジプトに戻って、苦しみ呻くイスラエルの民をエジ

プトから脱出させることになるのです。

第2の火は夜です。深い夜、ともし火が燃え続けています。モーセの時代から200年くらい後でしょうか。ここはカナンのシロという町の神殿の中です。一番奥の至聖所には、十戒を刻んだ石の板を入れた神の箱が安置されています。そのそばで、少年サムエルが寝ています。

「1 少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。そのころ、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった。2 ある日、エリは自分の部屋で床に就いていた。彼は目がかすんできて、見えなくなっていた。3 まだ神のともし火は消えておらず、サムエルは神の箱が安置された主の神殿に寝ていた。」サムエル記上 3:1-3

「主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった」時代。今と同じです。神さまの言葉を生き生きと聞くことができない。神が与えてくださるビジョンを見ることもほとんどできない。そういう信仰の衰えた時代です。

夜通し神のともし火を灯しています。神の言葉がほとんど聞こえず、神のビジョンを見ることもできなくて、不安や恐れ、困難に脅かされているとしても、夜に光を放ち続けるともし火

は神の守りを示すかのように燃え続けています。

そのとき、呼ぶ声ははっきりと聞こえました。

「サムエル、サムエル」。

サムエルは、自分が仕えている老祭司エリが呼んだと思って駆けつけましたが、そうではありませんでした。神がサムエルを呼ばれたのです。神はやがてサムエルをとおして人々に語りかけられます。

あのシロの町の神殿の奥に夜通し灯っていたともし火も、神の愛のしるしではないでしょうか。

わたしたちの礼拝堂には、復活日の前夜から復活のロウソク（パスカルキャンドル）をともし続けています。イースター前夜から今日の聖霊降臨日までの 50 日の間、これをともし続けるのが教会の長い伝統です。それは主イエスが生前、また昇天に際して約束してくださった聖霊を、希望をもって待ち続けるという意味があります。これもまた、燃え続ける神の愛のしるし、キリストの愛のしるしです。

第 3 の火は朝、夜が明けた頃です。7 人の弟子たちは夜通しガリラヤ湖で魚を取ろうとして、1 匹も網にかかりませんでした。疲れ果てて舟の中に倒れ込んでいると、岸のほうから呼びかけ

る声があります。ヨハネ福音書に記された出来事です。

「子たちよ、何か食べるものがあるか」

「ありません」

「イエスは言われた。『舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。』そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。」ヨハネ 21:6

「あれは主だ」という声にペテロは急いで海に飛び込み、他の弟子たちは取れた魚を引いて岸に上がりました。すると自分たちに呼びかけたその人は、岸に炭火をおこして、その上に魚を乗せて、朝の食事を用意して待っていたのです。

7人の弟子たちはじっと、赤く燃える炭火と焼けていく魚を無言のうちに見つめながら、その人のことを感じています。

その人が言いました。

「さあ、朝の食事をしなさい」

確かめなくても疑う余地はありませんでした。疲れた弟子たち、徒労を味わった弟子たちのために、イエスが朝の食事を用意してくださったのです。燃える炭火には、イエスのうちに燃える弟子たちへの愛がこめられています。

昼間、モーセの見た燃えて燃え尽きない柴の火。夜、サムエ

ルの傍らに夜通し燃えていた神のともし火。そして朝早く、イエスが弟子たちのために朝の食事を用意して下さったときの燃える炭火。これらはいずれも、尽きることのない神の愛、イエスの愛を示していたのです。

そしてその神の愛の火は消えることなくずっと燃え続けて、ついに激しく燃えさかって人々の心を燃やして突き動かす時が来ました。それが聖霊降臨日です。神の愛の火は激しく燃えてひとりひとりに、また会衆全体を包み、その火は燃え続けて今日に至りました。

わたしたちひとりひとりのためにも、また教会全体のためにも、神の火は燃え続けています。

今日の福音書でイエスは弟子たちに息を吹きかけてこう言われました。

「聖霊を受けなさい。」 ヨハネ 20:22

弟子たちは燃えて燃え尽きない神の愛、けっして弟子たちを見捨てることのないイエスの愛の火を吹き込まれたのです。

どうかそのことを、主イエスがわたしたちにもして下さいますように。アーメン